



五島の良いところを
多くの人に
伝えていきたいですね。

誌面の制作は、編集長やスタッフとミーティングを重ねながら進めていく。



「夜は飲みに行くことが多いですね。店に行ったら顔見知りがたくさんいて、いろんな話ができるのが楽しいんです」と言う稲葉さん。移住以来、人との縁を大切に育んできた。

とキッチンカーでハンバーガーを販売しているほか、地域の野球やソフトボールにも参加しているため「全く休みがない」と笑う。「でも島は日々の時間の流れがゆっくりしているので、休みがなくても楽しいんです」。充実した暮らしぶりが伝わってくるが、稲葉さんはまだまだやりたいことがたくさんあると話す。「実は今、移住当初から抱いていたもう一つの夢を叶えようと奮闘しています。バンドをやっていた音楽スタジオを作りたいと思っていました。都会のアーティストが五島に滞在しながら創作活動ができる、そんな場所にしたいです。この五年間でたくさんの人との繋がりができて、ようやく「fully」の稲葉くんがやるなら応援するよ」と言ってもらえるようになりました。島には音楽を好きな人たちがたくさんいます。ゆくゆくはそういう人たちと協力して、島で音楽フェスをやりたいですね。音楽スタジオがその一歩になれば嬉しいですね。稲葉さんの挑戦は、これからだ。



誌面には地元ならではの情報が満載だ。



「fully」は年に4回発行。五島列島はもちろん、福岡、大阪、東京など400カ所以上で配布している。

FUKUE ISLAND ③

fully
編集部



稲葉健太さん

五島の魅力を発信し、さらに高めていきたい。

五 島の情報を伝えるフリーマガジン「fully」の副編集長を務める稲葉健太さんは、仕事も住む場所もないままに福江島にやって来た。島には移住を考えている人が三カ月間無料で過ごせる短期滞在住宅があり、稲葉さんもまずはそこで生活しながら家と職探しを始めたという。

「移居前、五島の情報を調べようとしても古い情報ばかりでした。観光客や移住者の人たちに

役立つ雑誌やフリーペーパーがあればいいなと思い、市役所に起業の相談をしたところ、現在の会社の社長を紹介していただき、すぐに就職が決まりました」。

現在、稲葉さんは島内に新しくオープンした店を紹介するページを担当している。「プライベートでは足を運ばないような会社を訪れたり、いろいろな人たちと知り会えたりするのは楽しいですね」。

大阪で生まれた稲葉さんは東京で一年ほど勤めた後、福江島へやって来た。東京の暮らしが肌に合わなかったと言う。「この島では近所の人たちと何気ないおしゃべりをしたり、困っていることがあったら手伝ったりと、僕が小さい頃に感じていた人の温もりが残っています」。

週末は移住者仲間



会社のビルの屋上からは福江港周辺の町並みが一望できる。稲葉さんは、ここで休憩するのが好きだという。